R6(2024)年 共通テスト本試『草縁集』現代語訳

次の文章は、「車中雪」という題で創作された作品の一節である（『草縁集』所収）、主人公が従者とともに桂（京都市西京区の地名）にある別邸（本文では「院」）に向かう場面から始まる。

桂の院つくりそへ給（たま）ふものから、ア あからさまにも渡り給はざりしを、友待つ雪にもよほされてなむ、ゆくりなく思し立たすめる。かうやうの御歩（おぼ）き（ある）には、源少将、藤式部をはじめて、今の世の有職（いうそく）と聞こゆる若人のかぎり、必ずしも召しまつはしたりしを、イ とみのことなりければ、かくとだにもほのめかし給はず、「ただ親しき家司（けいし）四人五人して」とぞ思しおきて給ふ。

桂にある別邸を造り加えなさるけれども、（主人公は）少しの間も訪れなさらなかったのに、後から降ってくる雪を待つかのように消え残っている雪に誘われて、突然（桂にある別邸への訪問を）思い立ちなさるようだ。このような外出には、源少将、藤式部をはじめとして、今の時代の風流があると世に知られる若者の全てを、必ず お呼び寄せになってまとわりつかせ（＝側にいさせ）ていたのに、にわかに思いついたことだったので、こうだ（＝外出する）と連れて（外出しよう）」と決めなさる。

やがて御車引き出（い）でたるに、「空より花の」と、a うち興じたりしも、めでゆくまにまにいつしかと散りうせぬるは、かくてやみぬとにやあらむ。

すぐに牛車を出しているときに、「空から花が（散るように雪が降る。雲の上は春かな）」と（古歌を口ずさんで）面白がるけれども、（雪を）賞美しているあいだに、「早くも（消えた）」と散り終わったのは、このように（今日の雪が）終わったということであるのだろうか。

「さるはいみじき出で消えにこそ」と、人々死に

「それにしても、並々でなく（急に雪が）降って止んだぞ」と人々がとても激しく

返り妬(ねた)がる、「げにあへなく口惜し」と思せど、「さて
悔しがるのを、(主人公も)「本当にあっけなくて残念」　とお思いになるけれども、「そうはいうものの、
b引き返さむも人目悪(わろ)かめり。なほ法輪の八講に
(出発してすぐに)引き返すとしたら、世間体が悪いようだ。　やはり(引き返さずに)法輪寺の八講の法会を
ことよせて」と思しなりて、ひたやりに急がせ給ふ
理由にして(行こう)」とお思いになって、　ひたすら　急がせなさる
ほど、またもつつ闇に曇りみちて、ありしよりけに
うちに、　またも　まっくら闇に　雲が満ちて、　以前よりも　いっそう(雪が)
散り乱れたれば、道のほとりに御車たてさせつつ見
散り乱れたので、　(主人公は)道の端に　牛車を止めさせて　ご覧に
給ふに、何がしの山、くれがしの河原も、ただ時の間
なると、　どこどこの山、　それぞれの河原も、　ほんのちょっとの間に
にc面(おも)変はりせり。
景色が変わった。

かのしぶしぶなりし人々も、いといたう笑み曲げ
あの渋々(ながらの参加)だった人々も、　大変甚だしく　にこにこ笑って、
て、「これや小倉の峰ならまし」「それこそ梅津の
「これが小倉山だろうか」　「それこそが梅津の
渡りならめ」と、ロ々に定めあへるものから、松と竹
渡し場なのだろう」と、　ロ々に議論し合うけれども、　(雪でわかりづらく)松と竹
とのけぢめをだに、とりはづしては違(たが)へぬべかめり。
との区別でさえ、　失敗して間違えてしまいそうだ。
「あはれ、世に面白しとはかかるをや言ふならむ
「ああ、　世の中の風情(ある景色)とは、　このようなのを言うのであるのだろう
かし。なほここにてを見栄(は)やさまし」とて、やがて
よ。　まだ(しばらく)ここで　見て賞美しようかしら」　と言って、　そのまま
下簾(したすだれ)かかげ給ひつつ、
牛車のとばりを上げなさったままで、

ここもまた月の中なる里ならし
（まだ桂の里に着いていなずだが）ここもまた、月の中にある（桂の）里であるらしい。

雪の光もよに似ざりけり
雪の（反射による）光も、この世のものとは同じように見えない（と思われるほど神秘的に光り輝いている）なあ。

など[d]興ぜさせ給ふほど、[ウ]かたちをかしげなる童（わらは）の
などと（詠んで）面白がりなさるうちに、　見た目が好ましい、　童で

水干（すいかん）着たるが、手を吹く吹く御あと尋（と）め来て、榻（しぢ）の
水干を着た童が、　手を（温めようと）何度も吹きつつ（主人公の）後を尋ね求めて来て、牛車の台

もとにうずくまりつつ、「これ御車に」とて差し出で
の辺りにうずくまって、　「これを御車（の方）に」　と言って差し出し

たるは、源少将よりの御消息なりけり。[e]大夫（たいふ）
たのは、　源少将からの　お手紙だった。　邸の職員が

とりつたへて奉るを見給ふに、
受け取ってお渡しした手紙を　（主人公が）ご覧になると、（手紙には）

「いつも後（おく）らかし給はぬ、かく、
「いつも（私をお供に選ぶのに）後回しになさらないのに、このように（置き去りにされたので）、

X　白雪のふり捨てられしあたりには
白雪が降るように（外出のお供に誘われず）振り捨てられた（私がいる）このあたりには

恨みのみこそ千重に積もれれ」
（雪ではなく、あなたへの）恨みが幾重にも積もっている。

とあるを、ほほ笑み給ひて、畳紙（たたうがみ）に、
とあるのを（主人公は読んで）微笑みなさって、　懐紙に、

Y　尋め来やとゆきにしあとをつけつつも
（私を）尋ね求めて来るか（思って）と、ゆき進んだ雪に（車の）跡をつけながら

待つとは人の知らずやありけむ
（あなたを）待つとは、あなたはわからなかったのだろうか。

やがてそこなる松を雪ながら折らせ給ひて、その枝
すぐに　そこにある松を　雪がついたまま　折らせなさって、　その（松の）枝に

に結びつけてぞたまはせたる。
（「待つ」を含む返歌を）結び付けて（源少将の使いの童に）お与えになった。

やうやう暮れかかるほど、さばかり天霧（あまぎ）らひたり
だんだんと　日が暮れてきた頃、　あれほど　空が一面に曇っていた

しも、いつしかなごりなく晴れわたりて、名に負ふ里
のに、いつのまにか、雲一つ無く　晴れ渡って、（月を想起させる）名を持つ（桂の）里

の月影はなやかに差し出でたるに、雪の光も
の月光が　きらびやかに　差し込んでいるので、　雪の（反射による）光も

いとどしく映えまさりつつ、天地（あめつち）のかぎり、白銀（しろがね）
ますます　映えて（きらびやかさが）まさって、天地の果てまで、　白銀（の雪）が

うちのべたらむがごとくきらめきわたりて、あやに
続いているように　一面が輝いて、　たとえようもないほど

まばゆき夜のさまなり。
眩しい夜の　景色である。

院の預かりも出で来て、「かう渡らせ給ふとも知ら
桂の院の管理を任された人も出て来て、「このように（あなた＝主人公様が）お越しになるとも知ら

ざりつれば、とくも迎へ奉らざりしこと」など言ひ
なかったので、　すぐにお迎え申し上げなかったこと（お許しください）」　などと言って、

つつ、頭（かしら）ももたげで、よろづに追従するあまりに、牛
頭も上げないで、　何事につけても　こびへつらい過ぎて、　牛の

の額の雪かきはらふとては、軛（くびき）に触れて烏帽子（えぼし）を
額の雪を払おうとして、　牛車の横木に触れて（落としたら大恥となる）烏帽子を

落とし、御車やるべき道清むとては、あたら雪をも
落とし、　牛車が進む予定の道を綺麗にしようとしては、　もったいないことに（綺麗な）雪を

踏みしだきつつ、足手の色を海老（えび）になして、桂風（かつらかぜ）を
（軽率に）踏みつぶして、　手足の色を（寒さで）海老のように赤くして、桂の木の間を吹き抜ける風に

引き歩く。
（身体を冷やし）、風邪を引きながら歩きまわる。

人々、「いまはとく引き入れてむ。かしこのさまもいとゆかしきを」とて、もろそそきにそそきあへるを、「げにも」とは思すものから、ここもなほ見過ぐしがうて。

（主人公のお供の）人々は、「今は早く（牛車を別邸の）中に入れてしまおう。あちら（＝別邸）の景色もとても見てみたいよ」と言って、一斉に　そわそわとそそっかしくしているのを、（主人公は）「たしかに」とお思いになるけれども、ここもやはり（風流な景色で）見過ごしにくくて（移動をためらいなさる）。